

# シリアの牧畜社会の変容と資源管理

## 第6回：将来の資源管理への展望

2002年シリアを5年半ぶりに再訪する機会を得て、アブド・アルアジズ山地（以下、JAA）を調査した。調査の目的は、住民であるバグガーラ族（以下、Baqqara）の参加型村落開発の可能性を探ることにあつた。しかし、JAAの草原植生については、このシリーズで紹介してきたような配列的草原景観のおもかげはすでに消えており、さらなる植生変化を目の当たりにすることになった。1950年代末以降のBaqqaraを中心とした牧畜民の定住化の歩みとともに放牧や薪採取という人々の営みを大地に刻み込みつつ、40年余りの歳月をかけて少しずつ形作られてきたあの草原分布はみごとに破壊されていたのである。

近年JAAの草原が破壊された最大の理由は、山地周辺で1979年ごろより開始されて、じょじょにその区域をひろげてきた国による植林事業の展開にあつた。1990年後半以降、植林が加速度的に進行した結果、牧畜民の従来からの草原利用に大幅な変更が加えられ、利用範囲が手狭となった牧畜民が残された特定の放牧地への移動を余儀なくされた。もともとは社会的規範のなかで支族間による住みわけがなされていたが、放牧地利用の混雑による重なりあいから一部で過度な集中を招いてしまった。このような顕著な過放牧による草原植生の退行・劣化を引き起こす一方、植林による保護区に目を転ずると、植栽後の灌水などきめこまやかな管理がどうしても行き届かず、松やピスタシアなど植林樹木種がほぼ全滅にちかく枯死してしまっている。それまで牧畜民の里山として、その生活様式によって加えられていた山地植生への圧力がとりはらわれて、shrub類が雑草として繁茂することになった。このshrub類の過繁茂は樹木生育の阻害要因となるだけでなく、夏の乾季におけるたび重なる野火の発生など自然災害を生みやすい状況を生み出している。

結果として、JAAの草原は、過放牧と過繁茂との対照的で極端なふた通りの植生へと移行、分化してしまつた。いったい牧畜と植林というこの根本思想が相異なるかにみえる土地利用方式の両立はむずかしいのであろうか。今日のJAAの状況を見る限り、どちらの土地利用も成功しているとは言えず、どっちつかずの袋小路に陥っているようにおもわれる。ここに牧畜民が利用する空間のなかで、やや一方的に強行実施した乾燥地における植林活動の難しさを痛感させられるのである。また、50年まえの耕作地拡大による放牧地の減少化に対し、新たに資源適応しながらその困難を乗り越えり牧畜を継続してきたBaqqaraにとっても、今回の植林による保護区拡大は牧畜という生業自体を維持していけるかどうかの大きな瀬戸際に立たされていると言える。かれらが定住村に住み続けながらあくまで牧畜をつづけていくとしたなら、もはや放牧ではなく、近隣農村部から農産物残渣等の補助飼料を入手しながらの、より集約的な家畜管理の方向性を探ることになるしか道は残されていないであろう。薪採取については、密なshrubの除草と位置づければ、植林と共存していくことは十分可能であると考えられる。一方、植林後の資源管理にとっても、このように住民をもうすこしうまく巻きこんで、相互協力体制を築いていくことが今後の切実な課題になるとおもわれる。しかし、さらにこういうことも言えるのではないだろうか。BaqqaraはJAAに長年住みつづけるなかでかれらの生活資源としての草原植生に対して豊富な知識や経験を蓄えてきた。だからこそ、前号でみたように、むやみやたらに植生を利用するのではなく、牧畜民として草原を選択・評価した結果、ある種整然とした配列的草原植生景観が形成せられてきたのだと考えられる。われわれはしばしば資源管理と称して、衛星画像を処理することや、GISを活用しながらの植生図など資源図作成を想起する。これを資源管理の外からの眼とするなら、他方で住民による内からの眼を取り入れて、両者を結合させて複眼の資源管理としてみていくことが地域植生をより深く理解するうえで重要な課題になってくるのではないか。将来、再びわたしがJAAにはいつて活動する機会があるならば、牧畜民の草原植生に対する内なるまなざし、すなわちかれらの民族植物学的視座を加味した資源管理のスタイルで望みたいと考えている。



1950年代半ばの草原植生の状態



過放牧により枯死した  
*Artemisia herba-alba*



植林保護区：植栽されて6年目の  
*Pinus spp.*と過繁茂のshrub類